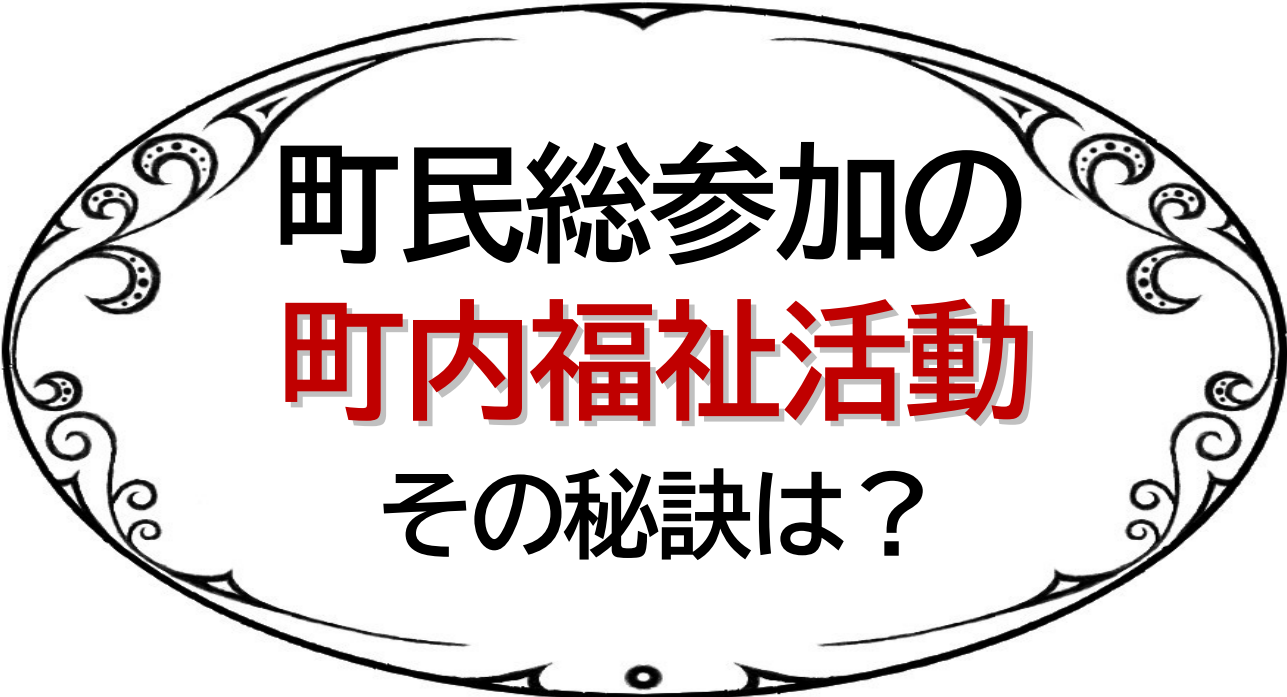


一部の役員だけに委ねている時代は終わった。  
今こそ町民総参加で、福祉の町内をつくろう



**町民総参加の  
町内福祉活動  
その秘訣は？**

住民流福祉総合研究所

木原 孝久

住民主導の地域福祉活動といえば、まず挙がるのが町内会の活動だ。しかし今、町内会の活動は行き詰ってきている。加入者は減る一方で、「加入しなくても困らない」とまで住民は言う。しかし超高齢社会を迎えて、特に小地域の福祉活動をもっと充実させなければならない。

では、町内の福祉をどうやったら充実させることができるのか。この際、町内会組織のあり方や活動形態等で思い切った発想の転換が必要だ。

## 1.助け合いをするには町内は広すぎる

読者は自分の所属する町内の広さをどう考えているだろうか。ちょうどいいか、ちょっと広すぎるか。そこで何をするのか？ 助け合いをするのか、福祉サービスをする所なのか、または人々がただ集まって暮らしているだけでいいのか。

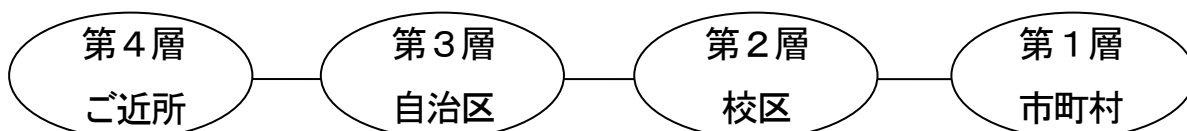
### (1)町内会が町内全域の活動を担うことの難点

これまでは、町内会が福祉活動をしていた。圏域で言えば、第3層は末端の層とされているので、当然、町内会が様々な福祉サービスを実施することになる。敬老会やその他のイベント、お祭り、老人クラブなどの互助組織も、ここに置かれている。趣味活動もこの圏域で行われている。要するに、住民向けの様々な活動は、この圏域で行われているのだ。

しかし住民にとっては、数百世帯の町内は広すぎる。だから、福祉ニーズも把握しづらい。連帯感もなかなか得られにくい。町内会で福祉に取り組む人たちの悩みは「ニーズが見えない」である。

### (2)町内のそのまた先に「ご近所」があった

地域をよく見ると、じつは町内の先に、もう1つの圏域があることが分かってきた。下の図を見ていただきたい。今は第1層が市町村、第2層が校区、第3層が自治区、つまり町内ということになっている。



しかしこの3つの層のいずれでも、助け合いはしにくい。例えば最も世帯数が少ない町内でも、数百世帯である。この距離では「顔が見えない」、だから助け合いができないのだ。

では助け合いはどこで行われているのか。住民は町内よりさらに小さい範囲で、細々と助け合っている。ここを「ご近所」と言ってみた。およそ50世帯。ここなら顔が見えるから助け合いができる。敢えて「助け合い区」と言ってもいいぐらいなのだ。

### **(3)要援護者と世話焼きさんが相思相愛**

ここが助け合い区と言える、もう1つの理由がある。ここに福祉の当事者がいるが、要援護の人は遠くまで行くことが困難なため、足元のご近所で自立生活ができるよう、周りの人に支援を求めている。幸いなことに、ここには世話焼きさんもいて、困っている人に日常的に関わっている。

一方に要援護者、もう一方に世話焼きさん—ご近所でこの両者が結びついて、助け合いが行われているのだ。助け合いの最高の条件が整っている。

### **(4)町内福祉はそれぞれのご近所に任せたら？**

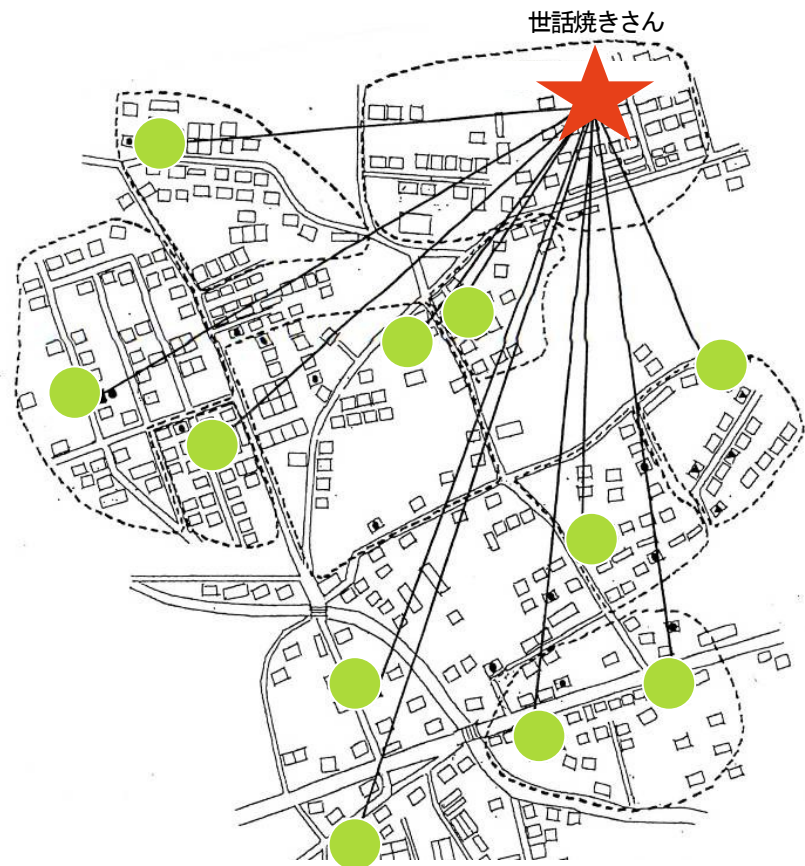
町内会は、いくつかのご近所から成っている。500世帯なら、10個のご近所（50世帯）から成っている。住民はそのご近所毎に助け合っているのだから、町内会は傘下のご近所をバックアップする役割に後退すればいいのである。

つまり、傘下の各ご近所が実質的に福祉を实践する場だと理解し、その活動を支援する役割に転換するということだ。そのためには、「支援」や「推進」をする技術が必要になる。人を動かす技術である。

### **(5)これが「頼み上手さん」だ**

次のマップを見ていただきたい。この全体が町内圏域だが、ここで大型の世話焼きさんを見つけた。「こんな広い所で、よく要援護者の困り事がわかりますね」と言ったら、彼女は「いや、私が分かるのは自分の足元だけ」と言って、自宅周辺を点線で囲った。ちょうど50世帯程度の範囲、つまり「ご近所」である。

では、その他の所はどうやって困り事を把握しているのかと聞くと、彼女は町内をいくつかの点線で区切り始めた。これらの「ご近所」ごとに、困り事が見える人を掘り起こし、その人から情報をもたらしているのだという。彼女がその困り事に対応できない時は、それぞれのご近所に世話焼きさんがいるので、その人に対応してもらうということだ。



## (6) 超高齢社会を先取りして、ミニチュア社会を

これから訪れる超高齢社会。当然、要介護者も増える。住民の行動半径は極端に小さくなる。数百世帯の町内規模は、あまりに広すぎる。

福祉以前に、「まち」の範囲も小さくする必要がある。町内規模の活動をご近所規模に縮めていくのだ。

基本的に、今まで町内にあったものをご近所に移そう。神社も、敬老会も、成人式も。サロンも趣味活動も。実際、地方に行くと、ご近所（50世帯）ごとに神社などがある。

グローバル社会というが、特にこれからの時代、人間が人間らしく生きていくには、その反対のミニチュア社会を目指す必要があるのだ。

## 2.町内主導からご近所主導へ移そう

今までの町内主導からご近所主導へ移していくには、どうしたらいいのか。最も重要で、また難しいのは、それぞれのご近所の人たちに、これからは自分たちのご近所の福祉は自分たちで進めなければならないということを自覚してもらうことだろう。

これまで町内福祉活動が盛んな地区であったほど、ご近所さんに主導権を移していくのが難しくなる。

しかし大抵の町内では、世帯規模が大きいほど、町内福祉は期待されていたほどには進んでいないはずである。「町内の住民の福祉ニーズが把握できない」と町内会の福祉担当者は嘆いている。

### (1)ご近所の問題をご近所さんたちの手で

- ①まず町内をいくつかのご近所に分割する。複数班で構成したり、地理的な事情を勘案する。町内によっては、町内そのものがご近所、50世帯という所もある。
- ②ご近所毎に世話焼きさん数名を探す。すでにご近所の福祉に関わっている世話焼きさんたちで助け合いをリードする。
- ③世話焼きさんと一緒に支え合いマップづくりをする。ご近所内の人材の分布、福祉問題、要援護者に誰が関わっているか、世話焼きさんは誰かなどが見えてくる。

### (2)マップで出た課題を世話焼きさん中心に解決へ

- ①前項の事実を踏まえて、ご近所福祉推進組織を立ち上げる。
- ②マップで出てきた取り組み課題の一つ一つを世話焼きさんを中心にして解決していく。それを町内会としてバックアップする。

### **(3)町内会の主催事業をご近所に移す**

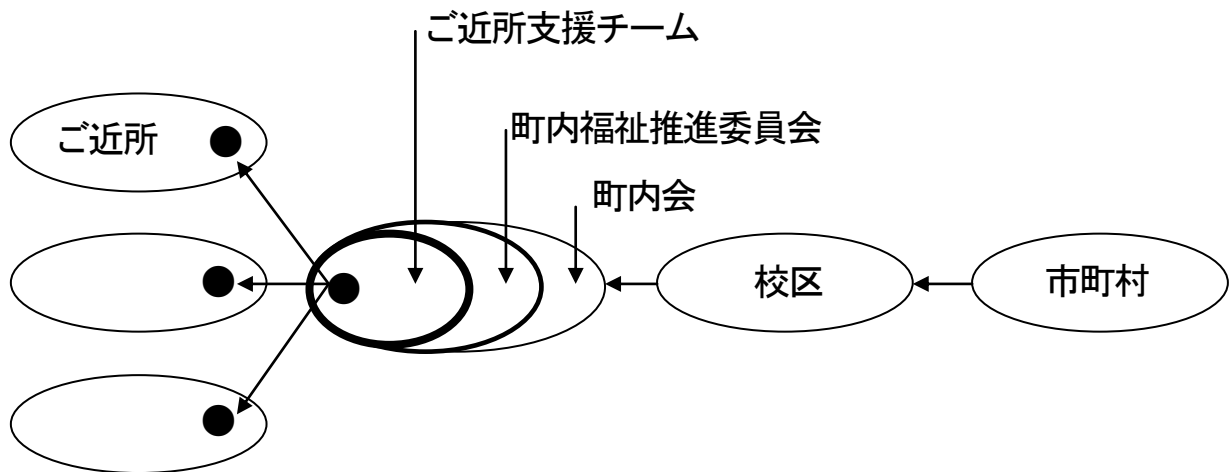
- ①これまで町内会として実施してきた事業を、これからはご近所毎に実施するように指導する。できるものから始める。
- ②まずご近所の主催事業の中から、ご近所に移した方がいい事業をピックアップする。
- ③ご近所に移す場合、どういう取り組み方になるかを考える。規模を小さくするだけではなく、事業の形そのものを変える必要があるかもしれない。
- ④それぞれのご近所毎に、その事業に類似したご近所活動を掘り起こし、それを生かすという方法もある。

## **3.町内会組織にご近所支援部門を設ける**

これまでのように自分たちで活動するのと違い、ご近所福祉の推進、つまり人を動かすという役割は、意外に難しい。そういう資質のある人を中心にして、ご近所活動を支援するのを主たる業務のグループを設ける。

### **(1)まず町内福祉を「推進」する部門を設ける**

- ①まずは、町内福祉を推進（実行）する部門を設ける。これまでは、町内会長や一部の人の意向だけで福祉活動をしていたところもあるだろうが、そういう時代は終わった。これからの超高齢社会では、福祉が町内会活動の柱にならねばならない。
- ②民生委員や町内にいる保健福祉関連の人材を発掘して、ここに入れてもらう。
- ③町内会はこれらのグループ活動を後方から支援する役割に下がる。ともすると、町内会組織の人材がそのまま福祉組織に入りがちだが、そうではなく、福祉は福祉に強い人で進めてもらおう。



## (2)福祉推進部門の中にご近所支援チームを編成

この推進委員会の中に、ご近所活動を分担して支援するチームを編成する。彼らが各自、自分の担当しているご近所の支援にあたる。

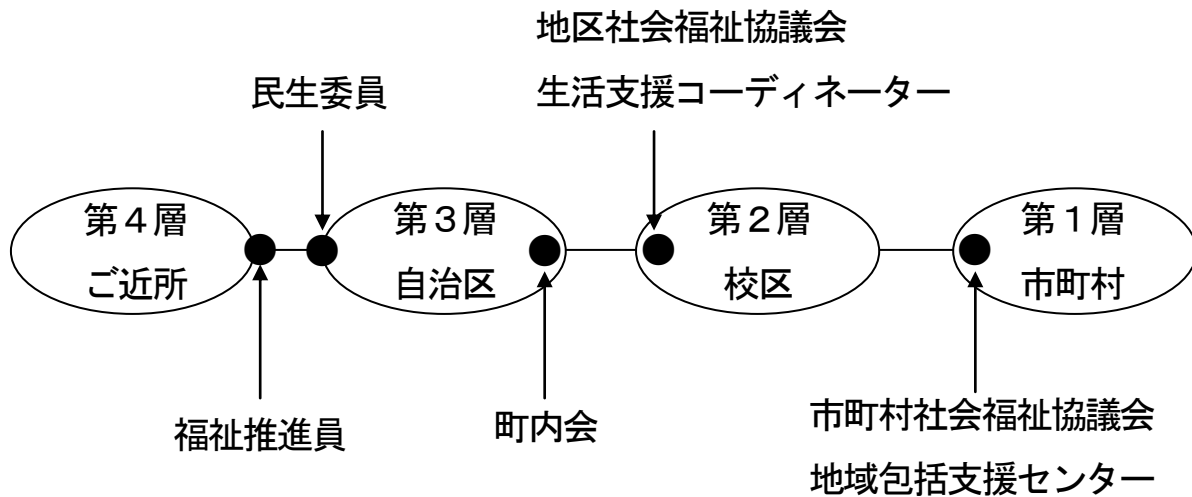
ご近所支援者として最有力なのが民生委員である。民生委員は、いつもご近所に出かけている、要援護者に直接接触している、要援護者の信頼も厚い、関係機関とのパイプもあるなど、多くの強みを持っているからだ。

## (3)ご近所活動支援の心得

ご近所は町内の一部ではあるが、ここは人々が日常生活の中で関わり合う場であり、組織的に活動をするご町内とは福祉のやり方がまったく異なっている。ご近所でのふれあい・助け合いのルールを尊重しよう。

例えば、①相性が大切。②一対一の関係。相手をまとめない。③双方向。助け合いだから、いただきものにはお返しをする。④ミエミエではなく、見えないように助ける。⑤天性主義（肩書ではなく、その人の生まれ持った資質を大事にする。世話焼きさんが活躍する）⑥社会的・公的な関係ではなく、私的・プライベートな関係。

福祉サービス活動に慣れた人が特に注意する必要があるのは、①相手をまとめない。②集めない。③一方方向は駄目。④引き寄せない。⑤十把一絡げにしない—ということだ。



#### (4)みんなでご近所支援に結集しよう

上の図を見ていただきたい。ご近所福祉を支援していい組織、人材はこれだけある。福祉推進員は、ずばりご近所の中にいるので、ご近所の世話焼きさんと一緒にご近所福祉を進める。民生委員は、ご近所をいくつか担当していて、始終ご近所に行き、要援護者に接触している。町内会はご近所の親組織としての役を果たせる。その他、校区には生活支援コーディネーターがいるし、地区の社会福祉協議会がある。また市町村域には地域包括支援センターや市町村社会福祉協議会もある。ご近所を応援すべき資源は、意外やこんなにあった。

なぜこのようにご近所を集中的に支援する必要があるのか。福祉の当事者である要援護者がいるご近所こそが、福祉の現場だからだ。ここで日々、地域の福祉ニーズが生まれ、発信されている。しかもそのニーズに関わるべき世話焼きさんもいる。これが地域福祉の原点なのだ。ニーズを把握するためには、ご近所まで行くこと。自分たちの役割を知るためには、ご近所に来て、マップづくりに参加することだ。

だから、ご近所の支援というよりは、自分たちの役割を発見するためにここへ来るということでもあるのだ。

「支援」と言えば、何か補助的な役割を担うことのように見えるが、そうではなく、自分たちの役割を発見し、それを持ち帰るということである。



## 4.町民総参加の町内福祉へ

町内福祉は一部の幹部だけで行われているが、これを変えていかねばならない。住民の自発的な意思で自治活動を進めるといふのなら、町民総参加に切り替えなければならない。

### (1)町内会長に過重な負担が

町内会の悩みの1つが、人材不足だ。ひどい場合は、イベントを担当する人材がないため、町内会長と副会長など、一部の人だけでこなしている。

とにかく会長に過重な負担が架かっている。広報誌の配布なども町内会長がやるを得ない地区もある。だから、定番の事業をこなすのに精一杯になってしまう。

### (2)「町内会に加入したくない」

町内会の加入率は下がる一方である。加入しない理由は、①入らなくても困らない、②役を引き受けるのがいや、など。

町民は、「この組織に入ったら、困った時に助けてくれるのか」と考えている。そして助けを求めてみて、反応がなければ、あとはいつ辞めようかと、その時期を測っている。町内会長が、自分もやっているのだから住民も協力すべきだと言っても、通らない。

### (3)まず町内活動のあり方を見直そう

#### ①行事を減らしてスリムになろう

いったん始まった事業は、次の代の町内会長がやめることはできない。そうやって、文化イベントを中心に事業が膨れ上がって、多忙を極めている。しかし、必ずしも前例に倣う必要はない。町民の関心事は福祉なのだ。文化イベントをいくつか廃止して、その分、福祉に力を入れるのだ。

#### ②「福祉」問題に取り組もう。住民はこれを望んでいる

男性はあまり福祉に詳しくないし、だからあまり取り組みたいと思わない。結局

文化イベントに偏ってしまう。

既述したように、今は超高齢社会。町民にもその世代が増えている。要援護者も同様だ。福祉に取り組めば、「私も参加しよう」と思うのでは？

### ③地域活動の主役はやはり女性。女性たちを主力にしよう

町内会活動といえば、何をするにしても男性役員が前面に出てくる。しかし、困っている人や要援護者を助ける福祉は、女性が得意だ。女性を前面に押し出そう。男性は後方支援に回るのだ。

### ④民生委員等、福祉に強い人を登用しよう

福祉といえば、まず民生委員が候補の1人になる。民生委員は、日常のご近所を巡回している。要援護者も把握しているし、訪問もしている。福祉の情報に詳しい。

## (4)町民総参加はこうして実現する

基本的に、町内活動は町民の手で担うべきであり、そのことを町民に訴える必要がある。一部の役員に任せておこうというのは、もう通らないのだと。その辺りは毅然として対応する必要がある。

### ①テーマ別にそれに強い人に任せよう

町民の中で資源になりそうな人材を徹底的に掘り起こす。そしてそれぞれのテーマごとに、それに強い人を発掘して、彼らに委ねていく。町内会組織としての活動だけが活動ではない、町民の活動はすべて町内会の活動だ、ぐらいいに考えたらどうか。

### ②町内のさまざまな活動グループも仲間に引き入れよう

町内には、いろいろなグループを作って活動をしている人がいるが、それも町内会活動の1つなのだという考え方で、協力を促す。その活動の一部を町内会と共同の事業として行うのもいい。

### ③本業で忙しい人には、その技術を発揮してもらおう

町内会活動への参加と言えば、とにかくいろいろな事業に参加することを求めているが、そうすると、大部分の人は引いてしまう。活動をもっと細切れにして、例えばIT関連の企業に勤めている若者に対しては、自宅を訪問してIT関連の相談をするというように、柔軟な参加の仕方を提示していく。

### ④ボランティア活動からセルフヘルプ活動へ

住民はそれぞれ何らかの問題を抱えており、それを解決するために同じ問題を抱えた人同士でグループを作っているケースも多い。それもまた町内活動とみなして、それを応援すればいい。町民がそれぞれ自分の所属する当事者グループで問題が解決されれば、それでいいのだ。

### ⑤当事者が各自、自分の担い手を確保すればいい

問題を抱えた町民がそれぞれ、自分の問題を解決するために助け手を確保するのを支援するという方法もある。当事者なら当然するはずの行為を側面支援するのだ。

このようにして、町民がいろいろな方法で自分の問題を解決していくのを支援することなら、エネルギーもだいぶ省略できるのではないか。みんなが、助けられ上手になるということだ。

## (5)日本人の活動参加の文化風土を踏まえて

町民に町内活動に参加してもらうための手法を考えてみよう。大事なことは、町内会活動は町民全員で進めていかねばならないということ、そのためにだれもが自分のできることで貢献しなければならないということ、町民に理解してもらうことである。

繰り返しになるが、これだけのことを町民に要求する以上は、町民にアピールできる活動（町民を助ける活動）を実行することが前提条件になる。

### ①日本人の参加パターンは、もともと「言われたら動く」受け身型。

日本人の活動への参加パターンは、受け身型である。積極的に自分からやるのは苦手だが、言われれば動く。だから、言えばいいのだ。私も頑張っているのだから、あなたも頑張してほしいと、ある程度強引に働きかけるのも1つの手だ。

## ②「柔らかな強制」が日本人にふさわしい

上司がやっているのならやる、組織ぐるみならやる、みんながやっているのならやる。これが日本人のよくある動き方だ。だからこの手を使えばいい。まず企業トップに働きかけて、社員に参加を促してもらうとか。一見、強制でないようで、じつは強制というのが、日本的な手法なのだ。

## ③夫婦一緒の参加

定年退職後、地域活動に参加する男性はあまりいない。彼等を仲間に引き入れる一つの方法として、「夫婦一緒に」がある。夫の地域デビューに熱心に取り組んでいる女性がいるが、そのやり方を見ていると、男性は妻を通して地域社会へデビューがするのが早道だとわかる。妻を通して参加という手法をもっと使ってもいい。

## ④1 人ひとりの活動参加を個別に育てていく

ある男性は企業戦士だったが、たまたま息子のためにソフトボールクラブの指導者にされたことがきっかけで、地域の活動に次々と入っていった。1つの活動をこなすと、やがて別の活動を誰かから提示される。それも引き受けると、また次の活動を誰かから提示される—というふうにして、いつの間にか地域のたくさんの人たちと知己になった。

この場合は本人が自覚して活動の発展をしていったが、大抵の場合はそういう「発展」の契機をつかめないままに、1つの活動で終わってしまうというケースが多い。

そこで、住民1人ひとりの参加状況を見定めながら、次はこの人に何をしておうかと、計画的に仕掛けていく人材がいればいい。

## ⑤「町内会役員経験者の会」

面白いことを考えた町内会長がいる。今年度定年退職して、地域に戻った男性を残らず把握する。そして有無を言わず、何らかの役員を引き受けさせる。1年後にはお役御免となるが、それで無罪放免としない。全員を「町内会役員経験者の会」に加入させる。そしてその後も何らかの役を担ってもらうのである。

この手法が効果的なのは、住民は元々活動をする気はないのだが、たまたま1つの活動に取り組んでみると、それなりにやりがいを感じ始める。ところが1年後、活動に慣れてやる気が盛り上がってきた頃にちょうどお役御免となる。その時に「町内会役員経験者の会」に入れて、とにかく活動を継続してもらう。やる気を継続させるというのがこの手法のポイントだった。

---

## 住民流福祉総合研究所

**木原孝久**

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1 4 7 6 - 1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>

---